

学苑・文化創造学科紀要 第八五三号 四一〜五二（二〇二一・一一）

延原謙と同仁会医療班中国派遣

雑誌『新青年』で三代目の編集長を務め、英米推理小説翻訳家として活躍した延原謙は翻訳の仕事辞めて昭和一四年に中国に渡ったとされてきた。ところが、昭和一三年にはすでに彼地にあったとの証言がある。また中国に渡った事情についても不明の点が多かった。¹ここではその後判明したことを紹介し、中国滞在の事情について検討してみることとする。

1

一般に、延原は昭和一四年に中国に渡り、江蘇省江都県揚州福寿庭九号で貿易店福寿洋行と映画館南京大戲院を経営したとされる。ところが義兄である岸田國士が残した記録によれば、その前年に延原が中国にいたことになっている。

國士は昭和一三年一〇月二〇日から三〇日まで内閣情報部および陸軍省の委嘱で中支戦線をめぐり、視察記録を『文藝春秋』に載せた。それをまとめた『従軍五十日』の中に次の一節がある。博多から飛行機で三時間かけて上海に着いた場面である。

さて、着陸場には軍報道部の馬淵中佐をはじめ、中山省三郎、火野葦平両

中西 裕

氏、義弟の延原謙などの顔が見えた。延原の勤務してゐる同仁会の診療班長、瀬尾博士にも敬意を表することができた。²

このとき、國士は腫物が出来て難渋しており、その手当てを受けた。次のように書いている。

宿へ外科専門の瀬尾博士が寄つて下さったのを幸ひ、その自動車と一緒に南市の同仁会病院へ連れて行つてもらつた。これは云ふまでもなく、軍と外務省の協力のもとに、支那難民の診療救済を目的に作られてゐる臨時の施設である。／私は、有難く、友邦の難民諸君に混つて、博士の懇切な手当を受けた。これは余談だが、病院の廊下、各科の診察室には、老若男女の患者があふれてゐた。延原の説明に従へば、患者の数は日増しに殖え、しかも、その階級層、疾患の種類が目に見えて拡大されつゝあるとのことである。最初は極貧のものしか集まらなかつたのを、近頃では、宣伝が行き巨り、信用がつき、外国の類似の病院よりは一歩進んだものだとかすると、そろそろ、金を払はせてもよさうな手合がやつて来るやうになつたさうである。³

【引用者注】／は原文での改行を示す

後日、視察を終えて上海に戻った時のことも再び筆にされている。

汽車から降りると、私は重いリュックを背負ひ、両手に若干の荷物を提げて長いガードを渡った。人混みのなかで、義弟の延原が私を探してゐる。それで助かった。／「略」私もさすがに疲れを覚えて、街を歩くのさへ億劫であった。憲兵隊の通訳をしてゐる私の教へ子、明治大学文藝科の卒業生山崎晴一君のところへ電話をかけると、早速飛んで来てくれた。／この前寄った時には充分時間を割くことができず、ゆつくり話す暇もなかったたので、何処かで飯でも食ひながら彼の手柄話でも聞かうと思つた。／同仁会病院と憲兵隊、この二つの日本の姿を私は上海といふ都会のなかに描いてみる。例へば、外国租界に巢喰ふ抗日テロリストの眼が何に向けられてゐるかといふことを想像するだけで、現在の上海が日本の如何なる表情にも無関心な、あるふてぶてしい身構へを示してゐるといふ気がする。⁴

以上の記述を見れば、延原謙が昭和一三年時点で中国におり、しかも同仁会病院で働いていたことは動かせない。通説の一年前には中国にいたのである。

同仁会は、日清戦争に勝利した日本が、欧米に伍して医学面で中国・韓国に啓発を行うべきだとの機運に乗じ長岡護美を初代会長として明治三五年六月一六日に設立された。アジア諸国に医学薬学およびその技術を普及し、衛生状態の改善を行うことが目的として掲げられた。設立に際しては近衛篤磨、北里柴三郎、岸田吟香らが関わり、創立総会には外務大臣小村寿太郎、清国公使蔡鈞も出席した。⁵会長はのちに大隈重信、内田康哉、林權助、近衛文磨と引き継がれた。

日中戦争の時期に、この会は中国への診療救護班派遣を行った。それに

は、中国における戦線拡大と日本軍の占領地増大にともない、該地の移動診療救護をいかにするかが課題となった背景がある。当時の事情は後に次のように説明されている。

この時期に占領地で移動診療救護を行ったのは、自己の医院は無傷であったため、日常の業務に戦時色を加え多忙に活躍した北京医院は別として、すでに長い在華生活とこの種の診療の経験を多分に持つ漢口・済南・青島3医院の救護班であった。これら各班が本来の勤務地に帰還したあとをどうするか、交代班を要するなら新班をどうして編成するか、さらに戦線特に華中戦線の拡大に対処する方策など、同仁会本部としては問題山積するに至った。⁶

そこで、昭和一三年三月二日、外務省文化事業部から同仁会に対して、「上海・南京・杭州に診療救護班を派遣する」ことなどの要請があった。⁷こうして同月中支派遣第一診療救護班を南京に送ったのに続き、第二診療救護班を上海方面に派遣することに決し、班長を慶應義塾大学医学部講師医学博士瀬尾省三に委嘱して次の命令を発した。

総発第二八五号

昭和十三年三月廿五日

同仁会会長

中支第二班長殿

- 一 貴班ハ別ニ指示スル所ニ依リ中支派遣診療救護班編成事務ニ従事スベシ
- 二 貴班長ハ来四月一日迄ニ班員名簿ヲ提出スベシ
- 三 貴班ハ準備完成次第出発スベシ
- 四 出発期日決定セバ報告スベシ
- 五 貴班ノ診療救護期間ハ昭和十三年十月三十一日迄トシ爾後ノ行動ニ関シ

テハ追テ指令ス⁸

瀬尾博士を班長として任命し、診療救護班員の編成を命じている。当時の会長は林權助。第二班は瀬尾班長の出身校慶應義塾大学出身者を主として編成された。⁹ 同じ林会長は翌月には次のごとく陸海軍大臣に対し協力依頼をした。

総発第三三〇号 昭和十三年四月十八日 同仁会会長 林 權助

陸軍 大臣 宛

診療救護班派遣ニ付依頼ノ件

中支派遣第一診療救護班ニ関シテハ曩ニ御高配ヲ蒙リ既ニ南京方面ニ出動致居候処今般更ニ第二、第三診療救護班別紙名簿ノ通編成左記ニ依リ出発ノ予定ニ有之候ニ就テハ輸送並業務遂行ニ関シ指導並ニ便宜供与方可然御高配被成下度此段懇願仕候

記

中支派遣第二診療救護班名簿 別紙ノ通（略）

出発期日 昭和十三年五月五日 東京駅発

同 同 七日 長崎出帆

先発者 班 長 瀬尾 省三 事務員 延 原 謙

事務員 大山 正一 運転手 茂 木 松雄

先発者出発 昭和十三年四月二十六日 東京駅発

同 同 二十八日 長崎出帆¹⁰

第一診療班はすでに南京に派遣していた。それに続き、今回第二（結果として上海）・第三診療班（同じく石家荘）を同時に派遣することとし、参

加者の名簿を付して、輸送などにつき便宜供与の要請をした形となっている。

これに対する了解の回答が海軍次官からあった。

官房第二三四号 昭和十三年四月二十二日 海軍次官 山本五十六

同仁会々長 男爵 林 權助 殿

中支及北支方面ニ診療救護班派遣ノ件

回答総発第三三〇号来照首題ノ件関係海軍官憲ニ通知致置候条了知相成度¹¹

先に引用した史料に見られるように、延原謙は同仁会第二診療救護班に一事務員として参加しており、しかも先発者として名前が挙がっていた。先発者は予定通り四月二八日長崎丸で出港した。延原もこの日に先発し、翌日上海に上陸したのである。第二班は当初杭州に赴くはずだったが、上海で勤務することとなった。杭州派遣は当局の当初の狙いであつたらしく、第二班について「本月二十八日長崎発杭州方面ニ於テ活躍スル予定」だと、会長からの陸海軍大臣宛四月八日付依頼には記載されていたものが、同月二四日付で「状況の変化」により、「上海及其の附近」に変更されたものであつた。¹² また第三班も杭州を改めて、石家荘に変更されている。

第二班の名簿は『同仁会四十年史』によると、班長瀬尾、医員中村勝以下一〇名、薬局長田邊定吉、調剤員多田新次郎、事務長米倉又記、事務員は延原以下三名、看護婦長古川のお、看護婦石倉壽子以下一三名、助産婦井川てる、運転手茂木松雄の総勢三三名であつた。ちなみに、班長、医員、薬局長、調剤員が委任官待遇、事務長、事務員、看護婦長が判任官待遇、看護婦、助産婦、運転手が傭人とされている。¹³ つまり延原は判任官待遇、下級官吏の扱いであつた。

こうして中国に赴く班員の留守宅一覧が同仁会の機関誌『同仁』に掲載された。延原については次のように記されている。

延原 謙 延原 克子 中野区本町通二丁目二五¹⁴

延原の中国派遣の際、克子夫人は日本に留まっており、短期の予定での単独渡航であったことがわかる。

五月八日後発部隊も上海に到着、診療の準備が行われた。

十日から「上海」南市の当班診療所及び郵船碼頭に手分けして出向き、一つは診療開始の準備、一つは薬剤材料の陸揚輸送に従事し、十五日には一同本院に引移つて合宿することになった。二十一日には本院及び二分院を継承して入院及外来患者の診療を続ける一方診療室の設備、宿舍の設営、「一」上下水道、便所、囲柵の修理等押れぬ仕事に事務は勿論医局、薬局、看護婦まで連日大重になつてゐる。¹⁵

「事務員」であつた延原は中心となつてこれらの仕事を果たしたことになる。五月一九日から診療が始まつた。診療時間は午前八時半から午後三時までとし、午前中は一般診療、午後は手術、処置、入院患者の診療に充てた。岸田國士の代表作『暖流』の主人公である病院事務長のモデルは延原ではないかと、延原の姪にあたる成井やさ子は語っている。¹⁶その根拠は語られていないが、延原が診療救護班で事務に携わつたことを知ると、なるほどと思われる。

第二班は上海で活動を行ったが、時に応じて分班を開設し、例えば次の例のように、それぞれ移動しながら活動していた。

十月四日から浦東昌路に開設してゐた分班は更に元督弁市政公署警察本局跡に移転することとなり、目下準備中である。¹⁷

このようにして始まつた診療がその後どのような経緯をたどつたのかは知るよしもないが、第二診療班長瀬尾博士をはじめとする各医師による昭和十三年七月三十一日付の業務報告にはその概要が記されている。

それによると、本院および分院において診療業務に従事するほかに六月中はコレラ予防注射班を組織して防疫業務に従事した。診療業務について言えば、「七月に入りて益々一般民衆の間に好評を博せるものゝ如く、来院患者日にく多きを加へて一日七百名を越ゆることも珍しからず」¹⁸という状況であつた。主として難民に対して無料での診療を行うことを使命として活動してゆく中で、次第に診療を受ける者が増え、富裕層からは料金をとるようになった。

五月二〇日に租界においてこの年初初めてのコレラ患者二名が発生。診療班は医師および看護婦を派遣して患者の収容や付近住民への予防接種を行い、臨時防疫班五班を編成して巡回させ、臨時隔離病舎を設けて患者を収容治療したが、七月までには防疫業務は同仁会華中防疫部に引き継がれた。²⁰コレラ予防注射の実施数は五月以降の累計で、一一二、二四三名にのぼつた。接種については現地民の間に、「注射に依りて男女共断種されとか、三年又は十年後に死亡するとか」といったデマが流れたという。²¹ちなみに上海の患者数は八月二〇日付で、七、〇五四人、死者二、三九三名との数字が出てゐる。²²最終的にこの期のコレラ患者は二万を越えたという数字もある。

『同仁会四十年史』に年度ごとの診療患者数の数値が挙がっている。昭

和一二三年度の数値は次のとおりである。

外来					
有料	中	日	外	中	日
	一	一	一	一三三、九五〇	四、八〇五
無料					一
入院	中	日	外		
	二五〇	二	23		

〔引用者注 中は中国人／日は日本人／外は外国人〕

診療面でも防疫面でも成果を挙げる中、事務部門は事務長を含め四名しかいなかったから、その一員の延原も多忙を極めていただろうことが想像される。しかし延原に関する具体的な事実は何も記録として残っていない。

2

このように活動してきた上海診療班は当初の予定よりは長く、約八カ月の活動を終え、二月一七日同仁会中支防疫部特殊診療班（班長澤純三）に引き継ぎ、二月二六日上海を出帆し、二九日に「内地に帰還」した。²⁴そのことは機関誌『同仁』の記事でも確認できる。

（五）上海診療班 班長瀬尾省三博士始め全員は既報の通り旧臘二十六日上海を出発し、二十九日東京に帰還し、中支防疫部診療班から班長澤純三博士外二十一名が業務を継承応援してゐる。²⁵

この記事で見ると、全員が二月二九日に東京に帰還しているものと読

める。実際には副班長格の中村勝医師が腸チフスに罹患し、帰国直前の二月二三日午前に逝去していた。しかし中村医師以外は全員同時に帰国したものであろう。より正確な情報を探してみる。「同仁会日誌」が『同仁』に掲載されている。二月二六日の条に次のように記されていた。

第二診療班瀬尾班長以下二十八名及故中村医員遺骨同夫人本日上海発の大洋丸にて帰還の途に就く²⁶

同じく二九日の条には、

第二診療班瀬尾班長以下十八名及故中村医員遺骨同夫人午前九時三十分東京駅著、宮城遙揮の後本部に帰還林会長（宮川副会長、田邊理事、井上理事列席）に班長より帰還の報告をなし林会長より今回 皇太后陛下よりの難有き御沙汰を伝達せられ次で慰労の辞あり。²⁷

とある。二九日の条の「十八名」は「二十八名」の誤植である。したがって、出発時に三三名だったのと比べれば、五人が足りないことになる。そのうち中村医師は急逝、西原敏男は一月に、大竹巖は二月に退職している。²⁸また、瀬尾班長以下の「依願免本職」の辞令が翌一四年一月二五日付で出されているのを見ると、派遣された中で医師の西原敏男、大竹巖、逝去した中村勝、薬局長の田邊定吉、看護婦の高橋マツの名がこの辞令の中に含まれていない。となれば、二八名とは派遣された三三名のうちこの五名を除いた全員となる。一月二五日付辞令に延原謙の名もあり、正式に彼が同仁会を辞するのはこの日付である。²⁹

延原謙は一四年には中国で貿易業および映画館を営むことになるので、帰国せず残留した可能性があるかとも考えたが、二八名の中に含まれるこ

とが確実で、帰国したと考えるべきである。

帰国についてはもうひとつの証拠がある。というのも延原は帰京した翌日にラジオドラマに出演しているからである。ドラマとはJOAKから昭和十三年一月三〇日に放送された小栗虫太郎作「探偵ラジオ・ドラマ赤馬旅館」である。実際に出演した配役が記録として残されている。役柄とともに記せば次のようになる。

シャーロック・ホームズ	江戸川乱歩
助手ウオトスン及びカーミハエル	水谷 準
アン・ウインスロープ	勝 伸枝
駅馬車の馭者	城 昌幸
村の牧師	小栗虫太郎
カムデン	大下宇陀児
女房マーサ	海野 十三
啞の悴フィル	蘭 郁二郎
従僕グレン	延原 謙
解説	木々高太郎
演出	久生 十蘭 ³⁰

当時の推理小説界のスターが名を連ねた豪華なメンバーである。当初は解説者が甲賀三郎、村の牧師・木々高太郎、カーミハエル・渡邊啓助となっていた。乱歩は自身に関するスクラップブックである『貼雑年譜』に『報知新聞』と『都新聞』の二紙の切り抜きを貼付したうえに、「甲賀君ハ役不足デ当夜ニナツテ出席シナカッタ」と書き込んでいる。³¹延原が三〇日にラジオ番組に出演しているのであるから、その前に帰国したことは明らかである。

かである。

しかし、そのことは逆に、帰京した翌日にいきなり出演することが可能だったのかとの疑問を起こさせる。しかし、当日になって出演者が変わったというごたごたを見ると、帰国早々でも出演は可能だったと考えるべきであろう。ましてや延原のせりふはほんの一言である。帰国の情報をいち早くつかんでラジオ出演に誘った人物―乱歩か―の判断と報道への情報伝達があったと想像される。延原の帰京が二九日であっても長崎には二七日に着いていたと考えてよいだろう。

乱歩の『貼雑年譜』にスクラップされた両紙には本読みに集まった出演者一同の同一写真が掲載されており、『報知新聞』には勝、水谷、城、小栗、乱歩、蘭、久生、大下、渡邊、海野が写っている。『都新聞』も同じ写真だが、甲賀、木々の二人の写真が嵌め込まれている。写っているうちの渡邊啓助は結果としてドラマに出演せず、写っていない延原謙は逆に出演した。渡邊啓助が演じるはずだった役は水谷準が兼ねた。延原が演じた役は乱歩の記録でも当初から延原の名になっているが、彼の出演を企画当初から予定していたのか、それともはじめは別人が演じるはずだったのかはわからない。しかし、延原はさすがに本読みには参加できなかったと考えられる。

3

同仁会が中国で行ったことは何だったのか。同仁会の性格および活動については毀誉褒貶、さまざまな評価がある。昭和十三年四月二二日、第二診療救護班が結成された祝の会において林權助会長、宮川米次副会長が無難な挨拶をする中、外務省文化事業部長蜂谷輝雄は訓辞で次のように述べ

ている。

諸君は此の度支那に渡つて診療救護の事業に従事されるのでありますが、
是は吾が日本の国策遂行を側面的に援助するものでありまして、吾々外務当局として厚く御礼を申す次第であります。³²

ここには国策遂行の援助だとはっきりと書かれている。あるいは同じ号の『同仁』の編輯後記には、「吾が同仁会亦此の聖戦に参加して、宣撫事業の一端に携はることが出来たのは何たる欣快、何たる光栄であらうか。」といった文言が並ぶ。³³

結団式に列席した医療部隊のメンバーのうち「男は紺戦闘帽にベルトつきの紺背広服又は詰襟、女は紺サージのそれぞれ颯爽たる制服姿で若き闘士達の意気は軒昂たるものがある」と新聞記事で評されている。³⁴

支那事変一周年記念日の診療班行動は、

毎日行ふラヂオ体操の前に皇居を遙拝し、次いで戦歿した勇士の霊に一分間の黙禱を捧げ、全班員分に応じて献金し、軍恤兵に献金して平常の庇護に対する感謝の微意を表した。³⁵

と記され、戦時体制下の実状を伝えている。

同仁会が中国で行った医療は評価されてしかるべきであろう。時あたかも中国ではコレラが猖獗を極めていた時期であった。³⁶その防疫に同仁会が大きな役割を果たしたこともまぎれもない事実である。³⁷ところが状況を視察した同仁会副会長帝大伝研所長官宮川米次博士は新聞のインタビュー記事でいささか誇張に過ぎるとみられることを伝えている。記事の見出しは「支那軍の捨鉢抗日 細菌戦術を暴く 伝研宮川博士の視察談」である。

我軍最前線の直後にあつて親しく防疫診療に従事して見て始めて恐るべき敵の「細菌戦術」を知った、この夏中前線に非常な勢ひで発生したコレラは細菌学的に見ても又實際流行の経過を調べても明らかに敵が故意にコレラ菌をバラ撒いたもので、自然に発生したものではない、まぐわ瓜にコレラ菌を植つたり、野菜畑や井戸にふり撒いたり甚だしいのは無智な農民の腕にコレラ菌をうち込んだりしてゐる有様だ。³⁸

一方、岸田國士の視点ははるかに冷静である。新聞に掲載された従軍報告に次の記述が見られる。

日本は外務省の手で同仁会病院を経営し、上海には自然科学研究所といふ堂々たる学術の殿堂を築いたといふかも知れぬがこれを宣伝の側からみれば例によつて露骨すぎるのである。そして、何故に、日本人は「日本のために」といふ看板が外せないのであらうか？³⁹

上海の同仁会上海慈恵医院を訪れた作家久米正雄は次のように書いた。

こゝは対支文化事業部内にある同仁会が、軍の特務部と連絡して主として難民の防疫と診療を目的として、偉大なる日支の楔となり、実質上の宣撫を行ふために、派遣された文化部隊だ。⁴⁰

無邪気に使われた「宣撫」なることばが実態を如実に示している。なお、久米は延原謙とも相知っていた可能性がある作家だが、この文章ではまったくそのことには触れていない。

第二診療班員であつた医師西原敏男は、「今回の聖戦の目的は、屢々声明された如く、抗日蔣政権排日軍閥の清掃にあつて、支那民族との相剋で

はない。之等愛す可き民族を指導向上せしめ、東洋永遠の平和を建設するにある。⁴¹」と書いている。当時の平均的な言挙げであろうが、今日の眼からすれば違和感を覚えざるをえない。

派遣にかかる費用が国費によっていたことは明確である。次に掲げる同仁会副会長の発言が実証している。

同仁会は財団法人でありまして、外務省の文化事業部の補助団体になって居ります。即ち外務省の文化工作の一部分を支那に於てすると云ふ建立^{マツ}で、外務省から多額の補助金を得て働いてゐる団体であります。今回の診療班及び防疫班の事業の如きは殆ど外務省のお金であります。即ち官金を頂戴致しまして働いて居るのでありまして、現在に於きましては丁度お上の仕事をしてゐるやうな具合になつて居りますが、之は相手が全く難民でありますので、収入を図ることが出来ない関係であります。⁴²

同仁会の評価については丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究」一―四⁴³が詳しい分析を行っている。「侵略に加担する意識が一切なかったとしても、それを看過さらには次第に関与してしまったのである。その結果、彼らが尽力した第二「欧米文化事業への対抗」・第三「日本の近代医療・医学の普及」の役割までおよそ無意味なものになってしまった⁴⁴との結論はまことに重い。

また、同仁会で防疫班防疫部長を務めた青木義勇は次のように書いた。

数年前某書で「中国侵略の医療的尖兵の役割を果たした同仁会……」の字句を見、また別の書物で「第二の同仁会を目標とする某協会が民間有志によって結成され……」という文章に行き当たった時、「そんなことはない。

それは局部的表面的観察だ」と感じたのが本書にとりかかった一つの動機でもあったが、日中戦争の同仁会の足跡を系統立ててみて、残念ながらこれに反証を呈することができなかった。ただ同仁会の現地活動には次のような事情があったことを各位の胸襟に深く訴えたい。⁴⁵

と記して、事情説明を行ったあとに、

ともあれ同仁会は、現地職員の善意はくまれることなく、会として「侵略的軍事行動の支持」があったという理由で解散させられた。解散団体のもう一つの類型――主要役員構成からみてもしかたがなかったが、右翼団体と同列に処断されたことはまことに残念であった。同仁会とその起原をとみにする東亜同文書院の場合（同仁会はやや遅く支流の形で創設されたが）、「終戦時、準追放団体として文字通り石もて追われるごとく姿を消しはしたが……」と、書かれているその「準追放」が、実にうらやましく感じられる。⁴⁶

言わんとするのは、現場では善意で診療防疫活動を行っているのに、それを政治的に利用する上層部への不満と不信なのであろう。しかし、それは同仁会そのものが当初から持っていた性格ではなかったのか。

軍特務部の宣撫衛生業務を分類して掲げた資料がある。そこには次のように書かれている。

医務主任軍特務部宮本軍医少佐の下に防疫部と診療部の二部門に分割されてゐる。防疫部は（一）特務機関及び各班の実施するもの（二）右の最寄部隊に依託するもの（三）同仁会防疫部によるものの三つに分れ、診療部は（一）特務機関及各班の実施するもの（二）右の最寄部隊に依託しあるもの（三）同仁会診療班によるもの（四）東本願寺診療班によるものの四つに分けられ

てゐる。⁴⁷

ここではこう分類したあとで、さらに次のように書かれている。

同仁会は今や皇軍の戦後工作の一パートとして我が大陸政策のため孜孜として協力寧日なき活躍を行つてゐるのである。軍特務部の宣撫衛生工作が如何なる実績をあげてゐるかは左に掲げる同仁会診療班の患者取扱数表の一例を見れば充分であらう。⁴⁸

4

それにしてもこの時期になぜ翻訳の世界から延原謙は同仁会の病院勤務という慣れない仕事に転身したのか。英米推理小説の翻訳にとって悪い時代になってきたことで、後の暗い時代を予見して、いち早くその世界から足を洗おうとしたのであろうか。それともどこかからの依頼があつてのことだったのか。

『新青年』で活躍した延原のこと、同仁会に参加して中国に渡るという消息は読者にとっても興味のある情報だったはずだが、その種の記事が見つからない。当時の総合誌『改造』や『中央公論』にも同仁会の診療班派遣や延原の同仁会参加について触れた記事は見られない。新聞記事にもなっていないようである。⁴⁹翌年の延原の中国定住が、あとで引くように新聞記事となつてゐることと比べても、沈黙ぶりがきわだつてゐる。岸田國士が書いた文章と同仁会の記録の中だけにしか消息が見られないというのはかなり奇妙なことに思われる。まるで隠密裏の行動のようにすら見える。

とはいえ、延原の同仁会診療班参加と前後するものの、『新青年』の編

集後記に「外国の雑誌や新刊書の輸入が制限されるやうになつてから、小説類の方面はすっかり淋しくなり、殊に探偵小説の愛好家にとつては何ともはや、云ひやうなき苦難の時代がやつて来たわけである。併し、これも御国のため、勿論われ／＼は自制して出来るだけその許された範囲内で最大の効果をあげるやう努力せねばならぬ。」⁵⁰といった文言が見られ、本職の翻訳仕事の将来に不安を感じたとしても無理はない。

翌昭和一四年に延原は中国に定住することになる。そのきっかけとしては、「長兄『岸田國士』が昭和一三年に内閣情報部及び陸軍省の委嘱で中支戦線の視察に赴き、揚州辺に駐屯の日本軍人が本を読みたがつてゐるので、その仲介役に適当な人を探していたところ」延原が引き受けたと義姉である岸田利子によって記されている。⁵¹延原は先に記したやうに國士に先んじてこの地にあつたことから、この書き方は何かしっくりこない部分を含んでいるが、それは些事で、國士の薦めにしたがつたとの理由は首肯できる。

また、延原の実兄竹内俊彦は当時中国で銀行の支店長を務めていた。その場所が上海とも奉天とも言われていて不明確であるが、中国にあつたことは間違いない。さらに義兄である岸田虎二もまた中国との関係は深い。虎二は息子の岸田森が、「カウボーイ」⁵²だったと語つてゐるやうに戦後は牧場主ともなつたようだが、「昭和通商という、軍にいろんな物資を供給する会社で、ずっとビルマのラングーン支店長として赴任していました」と岸田森の兄である岸田蕃が語るやうに、⁵³実業家として活躍していた人物である。この人物、活躍は各方面に及び、戦後は日本宇宙旅行協会事務長なども務めてゐる。⁵⁴虎二は『新青年』誌での「支那はよいところ 隠れたる支那事情通座談会」⁵⁵に出席してゐるほどであるから中国に詳しかったこと

は確かである。これらの諸事情がからみあって中国定住を決意したのかと考えられる。

あるいは中国であれば、当時の日本と違って、欧米の原書が入手しやすく、将来翻訳を再開するときに役立つとの期待もあったかもしれない。

しかし、それに先立って一三年に同仁会の診療班に加わって中国に渡ったことをどう考えればよいのか。定住のために現地（とは言っても上海と揚州とは離れているが）の状況を把握するともくろみがあったのだろうか。

延原の戸籍には「岸田克子と婚姻届出昭和拾参年五月拾日受附」と記されている。その十年も前から同棲していた二人は中国に渡る直前になって籍を入れたというのが近親者の記憶であった。中国に渡ったのが一四年だとすると、これは一年前になってしまう。その点を訝しく思ってきたが、一三年四月に同仁会の上海診療班としてすでに渡航していたことが判明してみれば、入籍はまさにその直後となり、この点の事情も納得がいく。

昭和一四年に延原謙が再び中国に渡った時期は、この年の半ば頃のように、新聞に関係記事が掲載されている。

中支に定住の延原謙

「略」ここに大陸定住のトップを切った御仁がゐる。彼は探偵作家の延原謙だ。彼の支那文？の転居通知に曰く「中支方面御視察等之場合何卒御枉駕賜度交通者海南線鎮江駅下車長江渡江連絡自動車仁天約三十分人情純樸之古都仁天候。中支揚州福寿庭九号、延原謙、勝伸枝」⁵⁶

この宣命書きを交えたような奇妙な漢文による転居通知から、延原と勝伸枝＝延原克子の二人が揃ってこの年に中国に居住したことが知られる。

- 1 注 拙著『ホームズ翻訳への道―延原謙評伝』（日本古書通信社 二〇〇九年二月一日）においても曖昧な記述しかできなかった。
- 2 岸田國士『從軍五十日』（創元社 昭和一四年五月八日） 八頁
- 3 同前 九一―一〇頁
- 4 同前 二一八―二一九頁
- 5 大里浩秋「同仁会と『同仁』」、大里浩秋、孫安石編著『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房 二〇〇九年二月一日） 四三頁。同仁会がいつの時点で財団法人となったかは未調査であるが、昭和一三年当時には財団法人である（宮川米次「北支・中支に於ける同仁会の診療班・防疫班の活動に就て」『同仁』一二卷一―二号 昭和一三年二月一日 四頁による）。
- 6 青木義勇『同仁会診療防疫班』長崎大学医学部細菌学教室水曜会 昭和五〇年三月一日 二八頁
- 7 同前 二八頁
- 8 同仁会編刊『同仁会四十年史』（昭和一八年六月一日） 三六六―三六七頁
- 9 青木義勇前掲書三〇頁によれば、昭和一三年三月二日、同仁会理事会において「今後編成する班は各大学医学部または医科大学を中心として人材を物色するを可とす」との方針が決まった結果として、第一班は東大、第三班は日本医大出身者を主とするのに対して、第二班は慶應義塾大出身者を中心として編成された。
- 10 前掲『同仁会四十年史』 三七〇―三七二頁
- 11 同前 三七二頁
- 12 同前 三六九、三七二頁
- 13 同前 三七二―三七四頁
- 14 「○人事 ○中支派遣第二診療救護班々員留守宅」『同仁』一二卷四号 昭和一三年四月二〇日 六四頁
- 15 「同仁会記事 ○中支派遣第二診療班」『同仁』一二卷六号 昭和一三年六月二〇日 六〇頁
- 16 筆者への直話。

- 17 「同仁会記事 ○診療班 (三) 上海診療班」『同仁』一二卷一十一号 昭和三年一月二〇日 七八頁
- 18 瀬尾省三「ほか」『第二診療班 (上海市) 業務報告 (昭和十三年七月三十一日)』『同仁』一二卷八号 昭和十三年八月二〇日 四三―五九頁
- 19 同前 四三頁
- 20 前掲『同仁会診療防疫班』三三頁
- 21 前掲「第二診療班 (上海市) 業務報告 (昭和十三年七月三十一日)」四五―四六頁
- 22 前掲『同仁会診療防疫班』三六頁
- 23 前掲『同仁会四十年史』三八五頁
- 24 前掲『同仁会四十年史』三八〇頁
- 25 「同仁会記事 ○診療班 (五) 上海診療班」『同仁』一三卷一十一号 昭和十四年一月二〇日 八二頁
- 26 「同仁会日誌」『同仁』一三卷一十一号 昭和十四年一月二〇日 八四頁
- 27 同前 八四頁 また、同様の新聞記事が、遺影を持つ夫人の写真付きで『東京朝日新聞』昭和十三年二月三〇日 一一頁に掲載されている。
- 28 「終戦当時の同仁会現地機関職員録」のうち「上海診療班第一医院 (上海診療班)」の退職者の部分。前掲『同仁会診療防疫班』付録九頁。西原敏男は『文藝春秋』一六卷二二号「時局増刊」一五 (昭和十三年二月一〇日 一六四―一八五頁) に掲載された「日本医学の大陸進出座談会」に出席しており、そのときの肩書きでも「元上海診療班員」となっている。
- 29 「人事 ◎辞令」『同仁』一三卷三十一号 昭和十四年二月二〇日 五六頁。瀬尾班長以下医師は会長名での辞令であり、延原らは同仁会名の辞令である。また、奏任官待遇の人たちには会長名の辞令、それ以外には同仁会名での辞令が交付されたものである。調剤員の多田新次郎は『同仁会四十年史』では派遣時点で奏任官待遇とされているが、ここでは同仁会名の辞令を交付されている。どちらかが間違っているのではないだろうか。
- 30 鮎川哲也他『日本版ホームズ贋作展覧会』下 (河出書房新社 一九九〇年四月四日) 一二三頁
- 31 江戸川乱歩『貼雑年譜 昭和四―一五』(複製版) (東京創元社 平成十三年三月一六日) 三七〇頁。なお、新保博久「解説 ヒーローの研究」前掲鮎川哲也他『日本版ホームズ贋作展覧会』下 一二二頁に記されているように、江戸川乱歩『探偵小説四十年』桃源社 昭和三十六年七月五日 二七〇頁にも当初予定の配役のままで掲載されている。
- 32 「○中支派遣第二北支派遣第三診療救護班結成」『同仁』一二卷四号 昭和十三年四月二〇日 五九頁
- 33 「編輯後記」『同仁』一二卷四号 昭和十三年四月二〇日
- 34 「同仁会から診療隊 昨日結団式」『東京朝日新聞』昭和十三年四月二三日 一一頁
- 35 瀬尾省三「第二診療班 (上海市) 業務報告 (昭和十三年七月三十一日)」『同仁』一二卷八号 昭和十三年八月二〇日 四三頁
- 36 火野葦平は『随筆珊瑚礁』(東峰書房 昭和十七年五月一五頁) に収められた劉寒吉宛書簡において、「今、上海は暑さと蚊に攻められながら、コレラとテロにおびやかされてゐる」と書いている (三〇〇頁)。
- 37 宮川米次は「北支・中支に於ける同仁会の診療班・防疫班の活動に就て」『同仁』一二卷二二号 昭和十三年二月二〇日 八―九頁において、上海共同租界からは二万人を越すコレラ患者が出ているのに日本軍の警備している地域からは一名の死亡者、一名の死体検察しか出ていないと述べている。
- 38 『東京朝日新聞』昭和十三年九月二四日 二頁。同様の説明は別の機会にもなされている。「中支方面に於ける宣撫診療防疫概況・付・上海同仁会活動状況」『揚子江』一卷三十一号 昭和十三年二月一日 六六頁には、同仁会宣撫班上海支部長井上善十郎が「九江で異型菌を発見したが、之は支那軍の散布した菌であつた」と発言したことを伝えている。
- 39 岸田國士「私の従軍報告 (三) 中支に張られた欧米の根」『東京朝日新聞』昭和十三年十一月四日 七頁
- 40 久米正雄「同仁病院訪問 スクラップ (一)」『同仁』一二卷九号 昭和十三年九月二〇日 七頁
- 41 西原敏男「支那管見記」『同仁』一二卷一〇号 昭和十三年一〇月二〇日

- 八頁
- 42 宮川米次「北支・中支に於ける同仁会の診療班・防疫班の活動に就て」『同仁』一二巻一二号 昭和十三年二月二〇日 四頁
- 43 丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究」一一四 『日本医史学雑誌』四五巻四号―同四六巻四号 一九九九年二月二〇日―二〇〇〇年二月二〇日
- 44 同前四 二〇〇〇年二月二〇日 六三三頁
- 45 前掲『同仁会診療防疫班』 一九六頁
- 46 同前 一九七―一九八頁
- 47 前掲「中支方面に於ける宣撫診療防疫概況・付・上海同仁会活動状況」 六五頁
- 48 同前
- 49 延原の消息についての記事はないものの、『文藝春秋』には同仁会の中国への診療防疫班派遣に関わる記事が見られる。次のものがある。前掲「日本医学の大陸進出座談会」、(元南京診療班長) 岡崎祇容「診療室から覗いた南京」『文藝春秋』一七巻二号 昭和十四年一月一〇日 一五六―一五九頁、(元石家荘診療班員) 長澤豊「前線診療班」『同』一七巻四号 昭和十四年二月一〇日 一四四―一五九頁。
- 50 「編輯だより」『新青年』二〇巻三号 昭和十四年二月五日 五四四頁
- 51 「岸田利女のあゆみ」、岸田利女『碑文谷影―岸田利女作品集』光村印刷 一九九三年一月一二日 五二頁。ただし、延原謙がそこでは延原譲と誤記されている。
- 52 岸田森「ニッポン個性派時代」、小幡貴一・小幡友貴『不死蝶岸田森』ワイズ出版 二〇〇〇年六月一〇日 三九頁
- 53 岸田蕃「僕の弟・森」、小幡貴一・小幡友貴前掲書 八五頁
- 54 植田弘隆「日本宇宙旅行協会会報『宇宙旅行』No.9」『ホームズ・ドイル・古本 片々録 by ひろ坊』二〇〇九年七月三日 (<http://blog.livedoor.jp/bsi221/archives/5124630.html>) 二〇一一年九月一四日 最終確認
- 55 「支那はよい」とい 隠れたる支那事情通座談会」『新青年』二〇巻四号 昭和

一四年三月一日 一九六一―二二一頁

56 「展望台 中支に定住の延原謙」『読売新聞』昭和十四年七月六日 二頁

* 文献の引用にあたっては旧字は概ね新字に直し、横組みの、・は、。に改めた。

* 拙著延原評伝出版後多くの方からご意見や資料のご提供を得た。中でも武井崇氏からは延原謙の本籍地と岸田虎二に関して貴重な資料をいただき、黒田明氏、植田弘隆氏からも様々な資料やご教示を得た。記して御礼を申し上げます。

(なかにし ゆたか 文化創造学科)